同志社田辺校地とその周辺の遺跡（6）

埴輪を出土した田辺町内の古墳

鈴木重治

はじめに

同志社の田辺校地内には、横穴式石室をもつ古墳時代後期の下司古墳群が、旧地形のまま観察できるように保存されているが墳丘上からは埴輪の出土はない。

埴輪を出土する古墳は、年代的に限定されるばかりか、全国的にみると種類や製作技法に、かなりの地域差が指摘されることがある。それでは、山城地方の一角を占める田辺町内ではどうか。

一、興戸2号墳と大住南塚古墳

田辺町内の発掘調査で、初めて埴輪が検出されたのは、興戸の古墳であり一九四三年四月のことである。

同志社中学を卒業後、京都大学の考古学研究室を大きく支えられた故梅原末治博士らによる古式古墳の調査を目的とした発掘調査時である。博士の報告によると、円筒埴輪と家形埴輪が出土している。報告書の中で、博士は大正六年三月九日付の大阪朝日新聞の古墳盗掘の記事に触れ、

大正三年八月頃、京都府綴喜郡田邊町大字興戸字山添山林の古墳。発掘者小川辰吉、田中廣吉、中村亀吉、西田音次郎四名、古鏡二面外に管玉、狐鍬石、石釧、車輪石等数十點領得。森本正太郎へ三十圓にて売却。

と引用し、森本氏から押収した多数の石製品や、買戻した内行花文鏡などについて解説していて、遺物群からは、四世紀末までの年代が与えられている。現在、興戸2号墳と呼ばれる小型の前方後円墳である。出土の遺物は、埴輪を含めて京都大学で保管されている。

なお、この古墳の所在地は、同志社校地と田辺町役場のほぼ中間地点の丘陵上にあって、酒屋神社脇の山道を北方にとれば、「興戸古墳群」の標柱に誰れしも気づくはずである。

一方、町内の最近の埴輪の出土例は、大住南塚古墳から検出した一群の埴輪であり、一九八六年から八七年にかけておこなわれた遺跡の範囲確認調査時の資料である。家形埴輪と円筒埴輪が出土し、中に朝顔形の円筒も含まれている。この調査時の最大の収獲は、墳形が従来考えられていた前方後円墳でなく、前方後方墳であることを確認したことと、埴輪の観察から、木津川のほとりにある飯岡車塚と同様に四世紀後半までさかのぼり得る古墳であることがうかがえた点である。その規模は、全長71

m、後方部の一辺37m、くびれ部の幅20m、前方部前面の幅30mが確認されている。大住地区の盟主墳でもある。

この大住南塚古墳の位置は、田辺町内の北部に寄っていて、大住小学校や月読神社にも近く、見晴しのよい小高い森を作りながら、府道の脇に前方後円墳のチコンジ山古墳と並んでいて、初めての見学者でもわかり易い位置にある。

二、薪の堀切7号墳

すでに触れた2基の古墳のほか、田辺町内からは表に示した古墳から、鳥形埴輪、馬形埴輪、人物埴輪などが検出されている。これらのうち、特に注目してよいのが、薪の堀切古墳群である。

埴輪を出土した田辺町内の古墳

古墳名	埴輪の種類	時期
飯岡車塚古墳	円筒	前期
興戸2号墳	家形，円筒	前期
大住南塚古墳	家形，円筒，朝顔	前期
岡村古墳	円筒（未確認）	中期
郷士塚古墳	家形，鳥形	後期
天理山古墳	円筒	後期
堀切7号墳	人物，馬形 家形，円筒	後期

一休寺から道を西にとって、薪神社の境内に入ると、まばらな雑木林の奥に竹藪が見える。甘奈備山へと続くこの竹藪の中の山路を進むと、ほどなく堀切古墳群の分布域に達する。発掘された古墳群のうち、とりわけて注目されるのが7号墳である。丘陵上の尾根筋に並んでいた小円墳のうち、もっとも高所に位置していた古墳で、空濠の中から転倒した状態で、多くの埴輪が出土した。調査中、直弧文で顔面を飾られた人物埴輪の頭部が、空濠の底に転がっているのを見たとき、すぐさま奈良県下や和歌山県下で出土していた入墨埴輪の顔が頭の中を走ったことを憶えている。調査後復元されたこの埴輪は、「日本列島発掘展」に出品されて、全国各地の会場を廻っただけに、町内出土の埴輪のうちもっともよく知られるところとなった。

顔面の中央の鼻から両頬にかけて、翼状に拡がって刻まれている文様と、ヘヤーバンド状に頭部をめぐる幅広の飾りの、左側頭部の文様とが共通している。直線と弧状曲線文を組み合せたいわゆる直弧文である。しかも素地が土師質でなく、灰褐色に黒味をおびた須恵質という点でも特徴的である。出土の須恵器によって、六世紀前半の年代が与えられる。このことは、現在知られている町内出土の埴輪のうち、もっとも新しい時代の埴輪ということになる。

なお、南山城地域の埴輪を製作技法の点からみると、特徴の一つとして「内面削り」の技法が指摘されることは注目してよい。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

堀切古墳群出土の埴輪